

働き女子のごほうびセミナー

「働くということ」

1. 「働くこと」を意識した子どものころと市役所での最初の仕事

——： 本日は、「働くということ」をテーマに、千葉悦子館長によるインタビューを行います。お話をお伺いするのは、南相馬市復興企画部長の庄子まゆみさんです。では、よろしくお願いします。

千葉： お忙しいところ、ありがとうございます。

庄子： よろしくお願ひします。

千葉： 2015年には女性活躍推進法が制定され、2020年には、女性リーダーを3割にしようという目標も設定されていきました。ところが目標を達成することはできませんでしたし、福島県においてもまだまだ進んでいません。そのようななかで、庄子まゆみさんは現在、南相馬市の復興企画部長で、まさに管理職のトップで、仕事を前に進めておられる方です。今日はいろいろなお話をお伺いして、どうすれば女性管理職の登用をさらに広げていけるか、そのヒントを得たいと思っています。ぜひ、率直なお話をお聞かせください。今日はよろしくお願ひいたします。

庄子： こちらこそ、よろしくお願ひします。

千葉： まずは、いつごろ南相馬市役所にお勤めになられて、どのようにして今に至っているのか、お話ししていただけますか。

庄子： 私は、大学を卒業したのが1984年（昭和59年）で、それからすぐに、当時の原町市役所に入りました。実は私、正式な職員になるまで4年かかっています。正式に職員として採用になったのが1988年（昭和63年）の4月から、それまでは臨時職員として市役所の中で勤務していました。

私は、大学を出てすぐに市役所に勤務しようと思っていましたが、その理由は二つあって、大学時代、スキーにはまってしまって、就職してからもスキーができる福利厚生がしっかりしている職場はどこかなと考えて、そこで市役所がいいかなというよこしまな理由が一つ、それから、もう一つは真面目な理由ですが、市役所というのは人が生まれる前から亡くなった後までのいろいろな仕事をする職場なんです。そのような仕事に関われるというところが魅力だと思って選びました。民間会社で、一つの仕事に特化してずっと極めるというよりは、様々な仕事ができる市役所が私の性格には合っていると思い、現在に至っています。

千葉： 大学時代にそういったことをいろいろ考えながらということですが、高校生や中学生の時はどんなふう

に考えていましたか。

庄子：私は小さいときからずっと働きたいと思っていたんですね。そう思っていた理由は、一つは、両親が非常に体が弱くて、もしかすると自分が子どものうちに両親がいなくなってしまうんじゃないか、早く自立しなければと、そういう気持ちが強かったということがあります。早く自立して、仕事を持って経済的に安定したいと思っていました。

それからもう一つは、私が中学生のころ、父が母に向かって「お母さんは社会性がないよ」って言ったんです。私はそれが、母が専業主婦だから社会性がないというふうに父が言ったような気がしたんですね。母は確かに、嫁いだときからずっと寝たきりの父の母親、しゅうとめの世話をしていました。今だと介護保険制度がありますが、そのころはそういう制度もなく家族で介護をする時代です。それをずっとやり遂げて、私たち子どもも育てて、また、私の子どものころというのは高度経済成長のまただ中で、父は土日も仕事をしてほとんどうちに帰れなくて、地域のこととか家族のことを母が一切やっていたわけです。その母に「社会性がないよ」ってひとこと言ったことがものすごく私は引かかったんですね。外で働く人は社会性があるって、うちの中のことを中心にやっている主婦とか女性は社会性がないんだろうか。私は、一度は外に出てそれを確かめてみなくちゃと思って、学校を卒業したら絶対働くぞということで、職業に対する意識はちょっと強かったかなというふうに思います。



庄子まゆみさん

千葉：時代的にはまだ男女雇用機会均等法とかも制定されていないときですよ。周りはどうでしたか。

庄子：そうですね。同級生は働くということについて強い意識を持っていた子はそれほどいなかったかなとは思いますが、お友達の中には、やはり大学まで進学して、私はこういう職業に就きたいということを言う

子はいたと思います。ただ、やはり、大方の人は職業意識は漠然としていたかなと。男の子に比べて女の子のほうの職業観というのが漠然としていたかもしれないと今考えるとと思いますね。

千葉：じゃあ、お友達とか同級生と、将来どんな仕事に就きたいかとか、「自立するために仕事に就くぞ」みたいな話はしなかったですか。

庄子：特にはしなかったですね。ひそかに私の中では仕事をするぞという感じてましたね。それもあまりかたくなにでもなく、当然、仕事をするんだらうなど。どういう仕事を私はするかなというのは少しずつ考えてはいましたけども。ここまで、こんなに一生懸命に仕事するとはあのころはまだまだ思わなかったですが、仕事には就きたいと思っていました。

千葉：余談ですけど、私は庄子さんよりもだいぶ年上なので、中学、高校の同級生ですと、短大を選ぶか、あるいは高校を卒業して就職する人が多く、四大に進学する子はそんなに多くなかったんです。時代の雰囲気は「いずれ結婚して奥さんになるんだから四大に進学する必要はないのでは」とか、「就職するとすれば短大ぐらいのほうが絶対有利」という感じてました。そのようななかで、私は四大に行くぞ、とにかく社会的に自立しなければいけないと思っていました。私たちのあとは、働く女性もどんどん増えてきて、そんなに肩肘張らないでも行けるような時代になりつつあったということかもしれませんよね。



千葉悦子館長

庄子：私が就職したころは、ちょうど男女雇用機会均等法、第1ステージでして、女性の総合職が出ていたりして、世の中の機運が変わった時期かなとは思っています。ただ、私が大学のころはバブルのころでもあって、ずっと働き続けるというタイプと、大学を出て腰掛けでいい会社に入って、いいお相手を見つけて退

社するという、そんな二つのパターンがあったかなとは思いますが。

千葉：就職先として、南相馬市役所を選んだのは地元だからですか。

庄子：はい。

千葉：ほかのところは考えませんでしたか。

庄子：大学は東京ですが、在学中からちょっと地元志向がありましたね。両親の体が弱かったというのもあり、あとはやっぱり、東京という華やかなところにちょっとなじめなかったというのもあって、地元福島県でというところが第一にありました。あとは、大学在学中から、夏休みとか春休みとか長期の休みのときに地元でアルバイトをして、どういう仕事があるのかということを見ていました。その中で、県の出先機関でアルバイトをしたときに、公的な機関は仕事の幅が広いなと思って、最終的には、人が生まれる前から亡くなった後までの仕事がある市役所に就職しようと決めました。

千葉：同期の女性はたくさんいたのでしょうか。

庄子：いや、いません。私1人でした。私の4年前に1人女性が入っていて、大卒の女性職員は本当に少なかったですね。受験する人は結構いたと思いますが、今では合格する女性が増え、半分近くいる年もあります。最近では、市役所の職員の男女の構成比は変わってきました。

千葉：では、本当に男性の中にぽつんと女性がいるという状況ですよ。

庄子：そうですね、はい。

千葉：やりづらくなかったですか。

庄子：そうですね。アルバイトをしていたときからもそうでしたけど、女性の仕事と男性の仕事はやっぱり違うんだなって、思っていました。女性の場合は、お茶くみから、当時は今のように分煙ではなかったので、灰皿を洗ったり始末をしたり。たばこを吸わない女性が、男性が吸った灰皿を整理するというのはどうなのかなと思いつながら、そういうものなんだっていいながら仕事をしていました。あとは、女性は比較的庶務的な仕事が多かったし、男性はどんどんいろんな経験をさせてもらえるというようなことを、仕事を始めた当初は感じていましたね。

千葉：そうすると、仕事が終わったあとに灰皿の掃除をするということでしょうか。

庄子：そうですね。

千葉：それは女の仕事？

庄子：はい。それが一般的でした。

千葉：時代を感じさせられます。

庄子：本当にそうですね。40年近く前はそういう時期でした。今ではそんな職場はほとんどないと思いますね。

千葉：そうですね。では、こんな職場は嫌だなと思ったことがありますか。

庄子：いや、そこはないですね。

千葉：そこまではない？

庄子：そうですね。机のお掃除なんかも女性の仕事になっていたんですが、私は、結構、ほかの職員の机の掃除をするのが好きで。というのは、机の掃除をすると、その人の仕事ぶりというか、仕事のしかたというのがわかって、この人はこういう仕事をするんだなと、そこがおもしろかったですね。灰皿の掃除だけは嫌だったんですけど、あとの雑用というのはそうそう嫌でもなく、あと、雑用をいろいろ頼まれることで、役所の中でいろんな部署に行けて、そんなことも結構楽しくて、こんなものだと思いながらそれなりにやっていたという感じですね。



千葉：そうか。そこが違うんですね。

庄子：そんなこともないと思いますけど。

千葉：仕事は庶務的なものも多かったということでしたが、まずはどこでどんな仕事をされたのですか。

庄子：市民課の中に国民年金の係があって、そこに配属になりました。国民年金というのは国の仕事で、それを市町村が窓口になって手続きします。そういう仕事なので、結構、お年寄りの方たちが窓口に来たりというような対応の仕事でした。当時は、市役所の仕事全体像が見えていなくて、市役所というのは国や県の仕事も引き受けてやっていたり、市町村独自の仕事もやっている、そういうところなんだなというのはあとからわかってきました。

国の仕事なので、基本的には法律や各省庁の規則に基づいて進めるものなので、市町村が柔軟に変えたりするものではないんですね。決められたとおりにやっていますが、窓口業務なので、いろん

なおお客さまがいて、制度の不具合を批判される方もいます。「国で決まっていることなので」といってもなかなか納得しない方もいて、市役所の業務は、多岐にわたるということをひしひしと感じました。そんなことを経験しながら、いちばん最初の職場では過ごしていました。

千葉： 市民課国民年金係でスタートして、そのあと3年か4年ぐらいで替わっていくんですか。

庄子： そうですね。そのあと市民課の中に新しい係ができて、そこで男女共同参画に関する仕事をすることになりました。そこは市民相談係という係でしたが、なぜか男女共同参画とか消費者行政など、いろいろなものを担当している係で、そこで初めて女性の係長に仕えることになりました。男女共同参画ということで、女性の係長と女性職員が配置されたのだと思いますが、そのときに他の市町村の男女共同参画の取り組みを調べ始めました。国民年金という国のお仕事から男女共同参画の市町村の政策的なところに関わっていくということが二つ目のお仕事でした。

千葉： 最初は国の仕事をし、次は市町村のそれぞれの政策の違いとかが見えてくる仕事に就いたわけですね。この市民課では、市民生活に関するいろいろなことを幅広く扱う仕事をやってらしたわけですね。

庄子： そうですね、いろんなことをやりました。あのころ初めて男女共同参画というのが業務としてできたんだと思います。新しい業務なものでこの部署が担当したらいいかわからなくて、結局、新しい係にやらせよう、みたいな感じでしたね。

千葉： それは、何年ぐらいかな。1990年代？

庄子： そうですね。

千葉： 90年代は、男女共同参画政策が大きく転換していく時期でもありましたね。

庄子： そうですね。あのとき東日本の自治体から計画を全部取り寄せたんですよ。どんな計画をつくっていて、どんな取り組みをしているんだろうと思って。そうしたら、結構小さな町でも計画をつくってちゃんとやってらっしゃる。そこにちょっとびっくりしました。だから、なんていうのかな、自治体の規模と政策の質は関係ない、小さいからどうのこうのじゃないんだというのが初めてわかりましたね。

千葉： すごいですね。東日本の自治体を全部取り寄せるというようなことは、そのときの係長がそうしなさいと命じたのでしょうか。

庄子： 一緒に話をしてやりました。何をやっていいか私たちもわからなくて、やっているところから勉強しましょうということで全部取り寄せて、それで、次はアンケート調査をやって、そんなふうには政策形成のステップを踏んでいくことになりました。私は計画策定までは担当しませんでした。いちばん最初の調査の部分を中心に担当していたということになります。

千葉： そうすると、自治体それぞれの役割や政策を打ち出していき、それがすごく大事なことだなということを経験した中から学んでいったわけですね。

庄子：そうですね。たまたまですけど、男女共同参画が私の中では政策に関わる第一歩だったと思います
ね。

2. 仕事をつくり出せることに気づいた 30 代

千葉：そして、そのあとはどんなお仕事を？

庄子：そのあと、秘書課の職員係という職員のお世話をする係があって、私は職員の福利厚生を1年だけやることになるんですね。そこで地方公務員法とかそういう地方公務員の基礎的なところをやり始めるんですが、当時の係長が、これからは女性がどんどんいろんなところに出ていくべきだという考えで、いろんな研修に参加させてもらいました。ある時、福島県内の市町村の職員が集まる研修に行かせていただいて、初めてほかの市町村の人たちと話をする機会があって、でも、そこには女性職員は私しかいなかったんですよ。やっぱり、女性職員は出してもらえないんだなと思って、でも、私はたまたま出させていただいて、そんないい経験をさせてもらったんですね。そのあと、市長秘書の業務を4年間やりまして、市長秘書は内勤のお仕事が多くて、なかなか出張とか出してもらえないんですけど、そのときも最初に千葉先生と出会う機会になったふくしま自治研修センターの長期研修に出してもらえました。1年間の研修で、千葉先生にいろいろアドバイスしていただいて、「すごいラッキー」なんて。

千葉：秘書課4年間で1年目を経て出してもらったのですか。

庄子：そうです。出してもらって。びっくりしました。

千葉：そのときに初めて庄子さんにお会いして。

庄子：そうなんですよね。

千葉：元気な職員がいるなど、私もそういう機会は初めてで、大変楽しくあの1年やらせていただいたことを記憶しています。



庄子：秘書係って内勤の仕事であまり政策に関わることがなくて、そんななかあの研修でより政策に関わる

ことになって、すごい楽しかったです。あの研修は県職員と市町村職員がグループを組むんですね。そうすると、市町村職員と県職員で、政策の考え方の違いがわかって、それがものすごくよかったですね。あのころから地方分権のはしりになってきた時代で、自分のまちを自分たちで自ら考える、課題はしっかり捉えるとか、そういうことを少しずつやっていく時代だったかなと思いますね。

千葉：自分で調べて、最後に政策提案するんですよね。

庄子：そうそう。

千葉：大変おもしろかったです。で、政策形成というか、その重要性みたいなこともさらにわかってくるということですよ。

庄子：そうです。だんだんおもしろくなってきたんですね。市役所の仕事っていろんな仕事ができるということが入ったんですが、仕事をつくり出していくというか、そういうことができそうだとことがわかってきました。

千葉：そのあたりからかなり自覚的になっていくわけですか。

庄子：はい。あのころから私の中では黒船が来たみたいなインパクトがありました。

千葉：このころおいくつぐらいですか。

庄子：30代半ばでしたね。

千葉：まだヒラなんですよ、そのころ。

庄子：ヒラのヒラでした。名刺もないぐらい。

千葉：先ほどのことに戻りますけど、1年間の研修に出してもらったとか、南相馬市は積極的に職員を派遣するといったことは、継続してやってこられていたんでしょうか。



庄子： 当時は原町市でしたけど、やっていましたね。必ず県には研修として派遣していましたが、それでネットワークを広げてきてほしいというのが当時の人材育成の考え方だったと思います。ただ、やっぱり女性にはそういう機会がまだなかった時代ですね。さきほどの研修も、女性は2人だけでした。私ともう1人は保健師さんで、やっぱり女性はあのころ少なかったですよ。

千葉： やっぱり女性が目立ちましたね、どういう人かなって。そのあとは？

庄子： そのあとは、また転機があって、福島に財団法人自治研修センターの「シンクタンクふくしま」という県の組織があって、そこに3年間出向することになりました。女性職員を長期に派遣するということは当時の原町市役所ではまるっきり初めてだったし、みんなから「本当に3年間行くの？」って言われました。それでもなぜか声をかけていただいて、私でいいのかなと思いつつも、ちょっと違う世界というか違う仕事を見てみたいと思って引き受けました。

千葉： お断りするという選択肢もあったんですか。

庄子： ありました。家族とよく相談してくるようにと人事から言われていたので、断ることもできました。でも、両親は「どうぞご自由に」という感じで、私も「そうですか」と、成り行きですつと行ってしまったような感じですね。

千葉： おしろ周辺の方々が、心配もし、驚きもし。

庄子： 本当にみんなすごい心配してくれて、3年間は長い、1年ぐらいだったらというふうに言われましたけど、やっぱり時代だったんでしょうね。今ではもう、南相馬市役所から3年ぐらいの派遣というのは女性職員でも行っています。今では全く当たり前ですね。

千葉： そうですか。庄子さんは、本当にいろいろ初めてのところを切り開いてきた人、ですね。

庄子： まあ、私が開いたというよりも、開ききっかけをもらってという感じです。

千葉： それで3年間シンクタンクでお仕事をなさって、それでまた変わりましたか。

庄子： 変わりましたね。シンクタンクなので政策的なことを中心にやりますし、あの組織は当時の90市町村、県内くまなく見て歩けるような組織だったので、いろんなところに行って地域課題を見ることができて、本当に勉強になりました。そこに県の職員も当然いたし、私たち市町村からの出向組もいたし、あと、民間から出向している方もいました。組織が違うところから来ていますので非常に勉強になったのと、あのころWindows98ぐらいのときで、情報のデータ処理がどんどん進んでいきました。これからはこういう事務処理をやるんだというところもびっくりして、いろんなことを経験できましたね。

千葉： で、戻ってきて係長になるんですか。

庄子：いや、まだ係長にはならなくて、企画課というところで、分権や、それから、市町村合併の仕事をしました。
企画課には9年間いました。



千葉：結構長いですね。

庄子：ずっと、先輩を送り出していました。

千葉：今まで政策に関わるような畑を歩いてきたから、そういうことを十分生かすことができる職場でもあったのでしょうか。

庄子：そうですね。いろんな政策を見てこられたので、企画課では結構いろんな仕事ができただかなと思います。

千葉：この期間、大変だったことは？

庄子：そうですね。地方分権一括法が施行になったり、あとは介護保険法が施行されたり、NPO法も施行されたりして、行政領域の概念がどんどん変わっていった時期でした。それまでは、行政の仕事・民間の仕事って二分だったんですが、それがグレーゾーンというか、民間と行政がどっちをやってもいいとか、半分ずつやったほうがいいのか、そういうふうに行行政領域がだんだん変わってきて、それについてどうすればいいのかという仕事が多かったと思いますね。指定管理者制度で公共施設を民間に委託するか、そういうのも始まったところだったと思います。

そのころちょっと悩んだのが、小泉内閣で「小さな政府論」というのがあって、「官から民へ」というキャッチフレーズがあったんですね。それで、市町村の仕事のコアの部分は実際何なんだろうと。国の仕事もする一方で、市町村の仕事で最後まで残る仕事というのは何か、市町村というのはどうあるべきなんだろうということを悶々と考えて、そんなときに、市役所の中ではなかなかそういう話をする人もい

なかったので、自治体学会というネットワークに入っている他県の市町村の職員とかそういう人とやりとりをしたりして、すごく元気をもらいました。

千葉：それまでは、せいぜい県内だったけれども、全国の自治体職員の方々ともつながりながら学び合う機会を、積極的につくっていったということですね。

庄子：そうですね。全国にはすごい職員ってやっぱりいるんですね。そういう方のお話を聞けるだけで全然違うというか、そんなことはありましたね。

千葉：そういうところには、すぐれた女性職員もおられましたか。

庄子：いました。むしろ女性のほうが多かったかもしれないですね。いるところにはいるんだなど、本当に励みになりました。

3. 管理職と東日本大震災のときのこと

千葉： そうしたら、そのあとは？

庄子： そのあと、今度、市民課に異動になるわけなんですけど、企画課のときに係長、最後の9年目は課長になりました。

千葉： すごい。一気に昇進したんですね。

庄子： 一気にじゃないですよ。9年間で。

千葉： 9年でヒラ、係長、課長と。とんとんとんと。

庄子： とんとんというか、長かったの。そのあと市民課に異動したのが2010年です。震災の前の4月ですね。市民課に異動しまして、それで、異動して1年たとうという3月に大震災を経験するということですね。



千葉： 震災後は市民課長として奮闘するわけですよね。

庄子： 大変でした。

千葉： そうですよ。女性ならではの大変さがありましたか。

庄子： そうですね。あのときはものすごい大変でしたけど、ある意味、いい経験だったと今になれば思います。

どこの市町村もそうですけど、市民課というのは、いろんなお客さまが来ます。震災のときは特に、津波で行方不明になった家族を捜す人、不安定になっているいろんなことを言いたいから聞いてくれという人への対応。あとは、津波で亡くなった方の埋葬の手続きも市民課の仕事でした。あのとき、600人以上の方が津波で亡くなったので、職員はひたすら夜の10時すぎまで死亡届を受け付けて埋火葬の手続きをしました。市民課の職員の中には津波で家族が行方不明のままずっと仕事を続けた人もいて、当然おうちもない。警戒区域になって自宅に帰れなくなって市役所に泊まり込んだ女性職員もいま

した。ひたすら目の前の市民の対応に追われていたのが市民課の職員で、それは男性職員も女性職員も同じだと思います。ただ、そんな時、女性職員が職場の陰のほうで避難して離れている子どもたちと携帯電話で「いつ帰ってくるの?」とか「いつ会えるの?」と聞かれているのを聞くと、それはやっぱり大変だったろうなというのは今思いますね。当然、男性職員も同じような状況ではありましたが、やっぱり女性職員がつかったんだと思いますね。子どもと離れて暮らすのはつらいので、と辞めていく職員もいました。あのころはどこの自治体の職員も同じように厳しかったと思いますね。

そんな中で、私は課長で、管理職で、職員を目配りする立場にあるわけなんですけど、結局、私自身もカウンターに出て8時間近く立ちっぱなしで市民の対応をすることになって、管理職としては何もできなかった。唯一、これではみんなまいっちゃうということで、毎朝、ずんどうの大きな鍋に、おみそ汁だけつくって持って行って職員に飲ませていました。当時は、お店も閉まっていて買い物もできないし、何も手に入らなかったんですが、うちにおみそだけは樽で買っていたのがあったので、それで作りました。やっぱりちょっと温かいもので落ち着いてから仕事をしてもらいたかった。いちばん落ち着きたかったのは私なんですけどね。職員がよくやってくれていました。

よくいろんなところで話しますが、平時にあまり評価されない職員が非常時に力を発揮する、そういうことがあります。普段はあまり条例とか見ないで仕事を進めて、「いやいや、違うでしょ」っていわれる子が、ああいうバタバタとしたときに市民の前にすっと出て行って、怒られようが何しようがすっと収めていく。逆に平時のときに評価されている子はちょっと気後れしちゃうとか。そんなことがあって、管理職としてこういう面を評価しなきゃいけないと気づきました。その点は管理職としていい経験だったと思います。

千葉：でも、大変だったと思います。

庄子：あのような大災害のときの管理職はどうあるべきかというのは難しいですよ。平時から管理職というのは判断をいつも求められるんですが、ただ、ああいう大災害時になると随時大きな重い判断を求められるし、平時だと下から問題が上がってきて管理職が最終的に判断するんですが、大災害のときは一人一人の職員が判断しないと対応できませんよね、目の前の市民に。時には間違った判断をした場合もあるかもしれない。でも、それを全部引き受けなければいけないというのがやっぱり管理職だし、あとは、そういうときこそ部下を信用して任せるところが強く求められるのかなというふうには思いましたね。

千葉：そういうことは、経験的につかみ取ってきたということですか。

庄子：そうですね。ああいう災害のときには頭で考える暇もないわけなので、やっぱり経験かもしれないですね。あとは、当時、私は課長でしたけど、その上に次長、部長がいて、そういう職員を見ながら判断を

していくという、上に倣っていくというところもあったかもしれないですね。大胆な判断をする上司もいて、なるほどなと思ったし。

千葉： 庄子さんは、今は部長になられていますけど、係長になるとき、課長になるとき、さらに部長になるとき、そのときそのとき当然という感じで受けとめたのでしょうか。

庄子： 私は、最終的に部長にまでなりたいという目標があったわけではないのですが、たぶん、係長とか課長ぐらいまでは今の世の中の女性登用からするとなくなるんじゃないかな、ならざるを得ないんじゃないかなというふうに思っていて、そのためにも、今のポジションよりも一つ上のポジションを見て仕事を進めていこうと思っていたんですね。今は係長だけど、課長になったら私はどういう判断をするだろうとか、そういうことを思いながら仕事をしていました。さすがに部長までは想定していなかったのですが。今、若い女性職員にはそういう話はしています。「必ず次は係長になるんだ」、「次は課長になるんだ」、そのときにどうすればいいのか、どうしたいのか、ということをいつも考えたほうがいいのかというのはいつも後輩には言っています。



千葉： すばらしいですね。

庄子： いや、そんなことはないんですけど。私、たぶん、わりと気が小さいので、次を想定してないともたないというか。なので、「どんとこい、いつでも何でも」という感じではなくて、いつもちょっと先を見ながらちょっと安心していたいということだと思います。

千葉： すばらしいです。

庄子： いえいえ。

千葉：これも余談ですけど、私などはほとんどそういうことを考えない人なんです。目の前に迫って来たところで「やるしかないか」となってドタバタとやるわけです。あまりよくないです。



庄子：いやいや、その瞬発力の差なんだと思うんです。私は瞬発力がないために、ちょっと先を見るんですね。その気持ちの小ささが出てるといふか。

千葉：管理職の声がかかっても、「自分の上司を見ていると大変そうでとてもできない」と自信が持てずにいる方が多いとか、管理職に就いても女性どうして足の引っ張り合いがあるというようなことを聞くことがあるんですが、そういったことはありましたか。悩んだことはないですか。

庄子：そうですね。あまりそこはないですかね。たぶん、前提として女性も登用されるべきだというふうにも思っていて、男性と同じように登用されるべきだ、それは女性だからということではなく、能力によって登用されるべきだと思っていましたし、そういう組織に私は幸せにもいたんだと思うんですね。若いときからそういう組織にいたので、そこはあまりないですね。

千葉：恵まれた職場だったんでしょうね。

庄子：だと思えます。やはり、若いときからいろんなところに出してくれる先輩がいたのがいちばんだったと思いますね。

4. 私にしかできない仕事

千葉：最近のお仕事はどのような感じですか。

庄子：震災の次の年度に、新しく再生可能エネルギーの推進をする課ができたんです。新エネルギー推進課というところで、その課長を2年やりました。原発被害があったので、当時の市長が脱原発のために再生可能エネルギーを普及しようということで、そのような仕事をしていました。そのあとは中央図書館の館長に異動しました。

千葉：だいぶ今までと違う職場ですね。

庄子：ですね。初めて教育委員会に行きました。実は学生のとき司書の単位を取っていて図書館司書の資格を持っているのですが、実務はやったことがなかったんですね。震災があって、市民課でいろんな震災時のものすごい混乱を経て、再生可能エネルギーという、復興の象徴的な政策をやりながら、中央図書館に行きたくなってきたんですね。というのは、今回の震災でいちばんの被害者って子どもたちなんですよね。本当に学べる大切な時期に何か所も避難をしたり、残った子も行動が制限されたり、お父さんだけ戻ってお母さんと避難をして家族がばらばらになっていたりして、そういう子どもたちになんとかいい環境をつくってあげたいというのが一つありました。あとは、南相馬の復興に向けて、壊れた建物を戻すだけではなく、人口が少なくなってもここ南相馬をしっかり考えてくれる市民がいるまちにしたいという思いがあったんですね。そのためには図書館というのが非常に可能性があると思っていました。図書館というのは子どもたちの読書から、公共性もはぐくむ場なんです。あとは、震災でいろんな思いを持った大人たちが図書館でちょっとゆっくりして、自分の人生やまちを考えてもらえたらと。壊れた建物を直すのは多くの職員ができるけど、図書館の仕事は私しかできないと思ったんですね。あとは、図書館の建設から携わってきた本当に優秀な職員が辞めちゃって、私に何かできないかという思いもあって、図書館には3年いました。



千葉：「私でなければやれなかったこと」ってどんなことですか。

庄子：そうですね。まず、図書館って好きな人は来るんですけど、本を読まない人は来ないんですよね。だから、まずは図書館に来てもらおうということで、たくさんの催し物、イベントをやりました。特に子どもたちの読書教育には力を入れて、図書館に来ると夏休みの宿題が全部できますというのをキャッチフレーズに、子どもたちに夏休みに図書館に来てもらうという運動みたいなことをしたり、あとは、館内のカフェを運営している障がい者支援団体のみなさんが講師になって、和綴製本のメモ帳をつくる市民向けのイベントをしたりして、できるだけ図書館に関わっている人を巻き込んでいろんな事業をやっていきました。それから図書館の神髄である資料ですね。図書館の資料をできるだけ広範囲にいろんな人が興味を持つように集めて、かつ、普通の分類法ではなく、いろんなテーマで棚をつくるなどの工夫もしました。あとは、移動図書館の導入もしました。なかなか図書館に来られない高齢者のいる仮設住宅、復興公営住宅、あとは幼稚園、保育園などもまわりました。そんなことで、できるだけ図書館が身近にあるようにしていきたいと取り組みました。

千葉：じゃあ、本当に庄子まゆみさんじゃないとできないことを3年間でやったわけですね。

庄子：いや、ちょっと言いすぎましたけど。

千葉：十分やったということですよ。



庄子：ずっといたかったですけど。そのあとは、教育委員会事務局の教育総務課というところで教育委員会の事務局の総務的なところを1年間やって、それから復興企画部長の3年目です。

千葉：じゃあ、ここ10年は本当に震災復興に関わるいろいろな部署をまわって、最後はいちばん総括的なところに就いたということですよ。

庄子：はい。

千葉：一つお聞きしたいことがあるんですが、この図書館を市民の方々が交流できる場所、または市民活動の拠点にしたいと思ったということですよね。市民との関係が大事だということはどの時期から意識されたのでしょうか。



庄子：そうですね、市民との関係を意識したのは、私が福島の「シンクタンクふくしま」にいた時期ですかね。あのときにちょうど2000年にNPO法が施行され、NPOという新しいセクターができたことですごく市民というのを意識しました。それが一つですね。

あとは、この図書館は女性たちの市民運動から始まったんですね。それまでは文化センターのワンフロアに図書館があったんですが、もうちょっと広くていろんな可能性があるような図書館が欲しいという市民運動が出てきて、そこからおつきあいが始まりました。結局、この図書館は市民運動の帰結であると思っていて、やはり市民の力というのはものすごく大きい。それも多くは女性たちがその運動をしてきて、この図書館と姉妹館のような形になっている伊万里の市民図書館も市民運動から始まった図書館で、自分たちに必要な施設とか機能とかを市民が積極的に自分たちで考えて提案していくというところにすごく自治の芽を見たというか、そんな気がします。

この図書館を建てるプロセスも市民検討委員会があったり、私たち職員の検討委員会があったり、あとは設計も公開のプロポーザルだったりして、いろいろ開かれた形でやってきたんですね。そういうことで、結果としていい施設ができたり、いい図書館の運営になったりして、そこで市民をすごく意識することになったと思います。

千葉：この図書館自体が市民運動の成果として出来上がっているというのはすごいことですね。

庄子：すごいですね。毎日、ある主婦の方が当時の図書館館長のところに通って、いろんな資料を出されてい

たと聞いています。彼女自身図書館を勉強し、図書館は貸本屋ではないというところをはっきり言われていました。最近は一サードプレイスなどといって、第3の居場所だという人もいるし、アメリカでは民主主義の根幹を成すところが図書館で、いろんな支援をしているんですね。図書館から福祉や教育、いろんなことを図書館が発信している。その主婦の方はそれをご存じて、その方が中心になって、周りを巻き込んで、本当に長い時間をかけてここをつくっていった、というところがやっぱりすごいですね。私たちも、そういう市民がいると緊張するというか、負けてられないと、そういうことがありますよね。

千葉：ここは恵まれた職場であり、上司の方々もおられて、そこで出会う女性の自治体職員や、地域にいる女性市民、そういう人たちとの交流、場合によっては緊張するような場面もありながら、まゆみさんがたくましく成長してきたのかなという気がするんですが。

庄子：はい。育てられてきました、私は。

5. 働き続けるために

千葉： そろそろ終わりに近づいていますが、もう一つだけ。この職場で、今は男性だから女性だからということで仕事の差というのはきつくないと思うんですけども、どうしても女性の場合は結婚していると、育児など家庭内のいろいろなお世話とか、担わざるを得ないという部分があると思うんですが、そういったことに関してこの職場ではいかがですか。



庄子： そうですね。出産、育児、介護と、それぞれに有給休暇があって、わりと恵まれているので、結婚してもお勤めを続ける人も多いです。結婚、出産、育児、介護って、人生の節目みたいなところですよ。社会全体をみるとその節目には退職される女性の方もいらっしゃると思うんです。退職をされて復職される方もいるし、復職しても同期と比べてキャリアアップが後れてしまうとか、復職したセクションが自分の希望とは違ってしまって、やりがいに疑問を持つとか、悩まれる方もいると思うんです。

そういう方々にぜひ言いたいんですが、女性は、出産などで、仕事をする上での時間軸が男性と違っていいと思うんです。すべて男性と一緒にという方もいらっしゃるけど、そもそも時間軸が違うんだからということ一度受け入れて、あとは、出産とか育児でちょっとキャリアアップが後れても、競争のレーンに乗るといってこたわらず、勇気を出して一回降りて、リセットして緩やかに進める働き方というものもありだと思うんです。何十年という長い時間働くわけですから、いろんな節目があって当然だし、自分自身の病気なんかもあるかもしれない。いろんなことが起こるので、それを自分の中で受け入れながら、他人と比べない働き方というのが必要じゃないかなと思っています。

もう一つ、長く働き続けるコツとして、人に助けをもらう勇気を持つことですね。すべて自分でやってしまって、なんとかしなきゃって思い悩んじゃう人もいますけど、できるだけ人に助けをもらう。一方で

自分が助けられるときはどんどん同僚とか後輩とかを助けていくことが必要かなというふうに改めて思います。結局、働き方や目標は人それぞれですし、それぞれに価値があるので、あんまり競争しないほうがいいんじゃないかなというのは思います。



千葉：モデルは一つではないと。

庄子：そういうことですね。

千葉：どうもありがとうございました。とても勉強になりました。また、知らないこともたくさん聞かせていただきました。コロナ禍でご苦勞も多いなか、貴重なお時間をいただき重ね重ね御礼を申し上げます。よかったです。

庄子：いえいえ、そんなことないですけど。ありがとうございました。